

# 写経所文書研究の展開と課題

Development and Problems in the Study of *Shakyojo* Documents  
(the Documents of the Sutra Copying Office)

山下有美

YAMASHITA Yumi

- |                |                |
|----------------|----------------|
| ①新しい潮流の出発点     | ⑤古文書学の見直し      |
| ②個別写経事業研究      | ⑥写経所文書の仏教史的分析へ |
| ③新しく「発見」されたテーマ | ⑦他の学問分野との関係    |
| ④皆川ゼミ以前の研究との関係 | ⑧歴史学分野の最新動向と課題 |

## 【論文要旨】

正倉院文書研究の新しい潮流は、1983年開始の東大の皆川完一ゼミ、それを継承した88年開始の大阪市大の栄原永遠男ゼミ、この2つの大学ゼミの形で始まった。その手法は、正倉院文書の現状を、穂井田忠友以来の「整理」によってできた「断簡」ととらえ、その接続関係を確認・推測して、奈良時代の東大寺写経所にあった時の姿に復原する作業を不可欠とする。その作業によって、正倉院文書は各写経事業ごとの群と、複数の写経事業をまたがる「長大帳簿」に大きく整理されていった。よって、個別写経事業研究は写経所文書の基礎的研究として進められ、その成果は大阪市大の正倉院文書データベースとして結実した。一方、写経事業研究を通して、帳簿論や写経所の内部構造、布施支給方法、そして写経生の生活実態といった多様なテーマに挑んだ研究が次々と発表された。これらの新たに「発見」されたテーマと同時並行的に、古くからの正倉院文書研究を引き継ぐ研究も深化し、写経機構の変遷、東大寺・石山寺・法華寺の造営、写経所の財政、写経生や下級官人の実態、表裏関係からみた写経所文書の伝来、正倉院文書の「整理」などの研究もさかんになった。さらに、古代古文書学に正倉院文書の視点を組み込んだ試みや、仏教史の視点から写経所文書を分析した研究も成果をあげてきた。2000年ごろから、他の学問分野が正倉院文書に注目し、研究環境の整備とともに、特に国語・国文学で研究が進められた。ほかにも考古学、美術史、建築学等の研究者も注目しはじめ、学際的な共同研究が進展しつつある。いまや海外からも注目をあびる正倉院文書は人類の文化遺産であり、今後も多彩な研究成果が大いに期待される。

【キーワード】 皆川ゼミ、個別写経事業研究、古代古文書学、仏教史的分析、学際的共同研究

本稿は、1980年代後半から2013年までに発表された写経所文書の研究文献<sup>(1)</sup>を対象とし、約30年<sup>(2)</sup>にわたる写経所文書研究の展開と課題について述べる。なお、敬称は省略させていただくので、了承されたい。

## ①……………新しい潮流の出発点—皆川ゼミ—

1983年10月、東京大学で発足した皆川完一ゼミ<sup>(3)</sup>については、栄原永遠男『正倉院文書入門』に詳しい。『正倉院文書目録』(以下『目録』<sup>(4)</sup>)の未刊原稿の確認作業を進める中で、写経事業ごとの関係史料の整理や事業の復原作業が行われた。4年半の皆川ゼミの後、石上英一ゼミでは、写経所文書の編年による網羅的な整理が行われ、そのあとの山口英男ゼミは、続々修の『目録』の編纂に直結するように、未刊原稿を用いた検討を行い、現在に至る。

一方、大阪市立大学では、皆川ゼミに最初の1年間出席した栄原永遠男が、大学院で1988年から正倉院文書のゼミを始めた。初めの2年は刊行された『目録』の検討、その後は個別写経事業(問写経)<sup>(5)</sup>の検討を行ってきた。

この2つの大学の、ゼミという形で始まった写経所文書の研究手法は、正倉院文書の現状を、穂井田忠友以来の「整理」によってできた「断簡」群であるにとらえ、「断簡」どうしの接続関係を確認(または推測)し、東大寺写経所に存在した当時の姿に復原する作業を不可欠とする。東大寺写経所では、これらの帳簿等(帳簿・伝票・文書・メモ等)は、a個別写経事業ごとに群をなしていたか、b複数の写経事業にまたがる「長大帳簿」(または「複合帳簿」)として存在していたと推測される。量的にはaが圧倒的に多いため、個別写経事業研究を共通課題として取り組もうという意識が、2つの大学のゼミを拠点とした初期の写経所文書研究で共有<sup>(6)</sup>されていた。一方、b「長大帳簿」<sup>(7)</sup>については、西洋子が独自に復原成果を公表している。

東西の研究交流を主たる目的として1989年には正倉院文書研究会が発足し、93年から『正倉院文書研究』が刊行され始めた。

## ②……………個別写経事業研究—写経所文書研究の基礎—

写経事業ごとに、写経所文書を整理し、その有機的関連を分析して写経事業の進行状況を跡づける作業が個別写経事業研究である。だが、この作業は、写経所文書の「断簡」の山を写経事業ごとに仕分ける作業でもあり、性格不明の「断簡」を明らかにできる手段でもある。栄原は個別写経事業研究をこのように意義づけ<sup>(8)</sup>た。それを積み重ねていくと、問写経の目録として活用されている、いわゆる「菌田目録」<sup>(9)</sup>を改訂する意味を持つと栄原は言う。

だが、個別写経事業研究は、論文として発表しにくいという難点があった。ある程度パターンがあるので、マンネリ化し、意欲が湧かないという研究者側の問題も<sup>(10)</sup>あったし、「何がおもしろくてそんなことばかりやるのか」といった周囲からの疑問の声も聞かれた<sup>(11)</sup>。だから、個別写経事業研究の公表には+aが必要との認識が研究者の間にはあった。そこで、個別写経事業研究を、政治史や王権・国家論、そして律令官司機構論等とリンクさせた研究論文として発表する傾向が強まった<sup>(12)</sup>。

写経所文書が、王権と密接に結びついた写経事業を担う写経機構の文書群であるので、この傾向は当然の帰結でもあった。

2000年頃になると、東大・大阪市大のゼミの成果が蓄積されてきたことを受けて、成果を公表しようという意識が高まった。東大の石上ゼミの成果は、1999年から「写経機関関係文書編年目録」として順次発表され、2010年に12回でひとまず完結した。<sup>(13)</sup>大阪市大では、2000年にゼミとは別に写経所文書研究会を発足させ、「菌田目録」の改訂版を作成し公表するために議論の場を持ち、成果の一部は、2007年より大阪市立大学正倉院文書データベース SOMODA として公開されている。<sup>(14)</sup>これらはいずれも、基礎研究だからこそ共有すべきであると考えられた。

### ③……………新しく「発見」されたテーマ—個別写経事業研究を基礎に—

個別写経事業研究と並行して、新たに「発見」されたテーマがある。帳簿論はその代表的なものである。帳簿論のイメージは研究者によって多少のずれはあるものの、おおかた次のようなものである。<sup>(15)</sup>個別写経事業ごとの帳簿群の分析が進むと、帳簿（帳簿セット）の形態・様式・機能の違いや特色が明らかになってくる。それを写経所文書の全体的な規模で把握し体系化したもの、また事務処理方式を反映した帳簿の形式に、どのような変化・発展がみられるかを論じたものを帳簿論と呼んでいる。これも皆川ゼミで共有された課題である。試論としては、大平聡の意欲的な論考をはじめ、いくつか発表されているが、<sup>(17)</sup>ここで言われたような体系化された帳簿論はまだ構築されていない。個別写経事業研究が蓄積されてきた現在、全体的に把握する条件は整ってきたといえるが、それらを全体的に把握して体系化に挑んだ帳簿論への展開は、一筋縄ではいかない難しさがある。

ほかにも新たなテーマとして次のようなものがある。たとえば、案主佐伯里足が事務の引き継ぎの際に用いた「鳥の絵」についての研究、<sup>(18)</sup>写経生たちと文芸のように、あくまでこの写経所での実態解明でありながら、古代下級官人の一面を投影している可能性を示唆した研究である。山本幸男は、「鳥の絵」が封として用いられたと考えた場合に、引き継ぐ帳簿群がどのように置いてあって、<sup>(19)</sup>どういう状態でひもで巻かれていたかを、原本に忠実な模型を作って試し、<sup>(20)</sup>図解した。このように帳簿の模型や見本を作って考察する方法も、帳簿の復原が可能になったから編み出された手法であり、野尻忠も習書の実態を実物大写真（コピー）で作成した模型を検討することで見事に解明している。<sup>(21)</sup>

また、写経所の内部構造や布施の支給方法についても、研究は著しく深化した。渡辺晃宏の金光明寺写経所の内部組織を解明した研究や、<sup>(22)</sup>大隅亜希子の布施支給方法の検討から装潢の組織的变化を明らかにした研究などは、<sup>(23)</sup>鋭い切り口で写経所内の組織や集団のあり方を鮮やかに描きだしており、従来では考えられなかったようなテーマに挑んだものとして評価したい。渡辺のこの研究がなかったら、私などは写経機構や造東大寺司の機構論を構想すらできなかったであろう。<sup>(24)</sup>布施の申請・算定・支給については、写経事業によって方法に違いがあり、具体的な事例を検討した論考も出ている。<sup>(25)</sup>私もこれらに学んで、<sup>(26)</sup>布施法と校経の実態に迫ってみた。

写経生の生活実態については、<sup>(27)</sup>柴原永遠男の一連の研究がある。特に請暇不参解と月借錢解の分析による写経生の苦しい生活実態は定説的な地位を得ているが、個別写経事業研究とは少し違う視

座で導かれたものであって、④で述べる内在的テーマを発展させたものといえよう。

それに対して、写経所内の集団や共同体意識に着目した大平聡の研究は新鮮味がある。過ちを犯した若い見習い写経生がまわりにかけての迷惑を、同族のベテラン写経生の庇護のもとで解決していった実態や、過状の正倉院展での実物観察をもとに、ベテランや位階をもつ写経生がまとめ役として写経所内で起きた問題解決に一役買う実態を明らかにした。これらは、写経所文書に深く入り込んで、その実態をえぐり出した点で、写経生の生活史に新たな1ページを加えるものといえる。ほかにも大平の人名表記論<sup>(28)</sup>や、写経所文書に頻出する「道守」が上馬養であることをつきとめた田中大介の人名論<sup>(29)</sup>なども、新しく「発見」されたテーマといえるだろう。

このように、写経所文書の新しい研究手法は、研究テーマの枠自体をも大きく広げた。もちろん後述する古文書学の見直しや一切経や經典群の仏教史的分析も新たな研究手法の産物であるが、個別写経事業研究に密着した成果ではないのである。

写経所文書研究が盛り上がりを見せる1993年に、栄原はあえて、写経所文書が「奈良時代の写経の全てを示してはいない」と注意を喚起した<sup>(31)</sup>。そこで、正倉院文書を残したこの写経所と、文書のやりとりがあることによって垣間見られる、内裏系統の写経機構や貴族の家の写経所<sup>(32)</sup>についての研究を、栄原は系統的に進めていった。奈良時代の一次史料群としては質量ともに突出した存在である正倉院文書を「相対化」することの重要性を自らの実践で示したのである。

#### ④……………皆川ゼミ以前の研究との関係—写経所文書の内在的テーマの追究—

個別写経事業研究によって、前述したような新しい「テーマ」の研究成果が多数発表されてくるなかで、皆川ゼミ以前から論じられてきたテーマを発展させた研究も盛んになった。それは、東大寺写経所の史料群であることに由来する内在的な論点を追究した研究であり、中には古い研究史をもつものも少なくない。1983年以前の写経所文書研究の代表的なものには、石山寺・東大寺の造営や写経所の変遷を的確に論じた1930年代の福山敏男の研究<sup>(34)</sup>、奈良時代の仏教史をテーマとした石田茂作<sup>(35)</sup>・堀池春峰<sup>(36)</sup>・井上薫<sup>(37)</sup>・藤野道生<sup>(38)</sup>・藺田香融の研究<sup>(39)</sup>、写経所の財政を分析した栄原の研究<sup>(40)</sup>、財政史の問題を正倉院文書に沈潜して論じようとして、表裏関係の調査から写経所文書の伝来にまで触れた吉田孝の研究<sup>(41)</sup>、下級官人としての写経生に着目した山田英雄<sup>(42)</sup>・野村忠夫<sup>(43)</sup>・鬼頭清明らの研究<sup>(44)</sup>、女性史の視点で写経所文書を研究した須田春子の研究<sup>(45)</sup>、衣食や服飾についての関根正隆の研究<sup>(46)</sup>、そして五月一日経と正倉院文書の「整理」についての皆川完一の研究<sup>(47)</sup>、造石山寺所関係文書を徹底的に検討してきた岡藤良敬の研究等<sup>(48)</sup>がある。これらの先行研究を受けて、皆川ゼミ以降の新しい研究手法を用いて発展させた研究には、写経所文書を残した写経所の変遷やこの写経所の上級官司である光明子家<sup>(49)</sup>・皇后宮職<sup>(50)</sup>・造東大寺司<sup>(51)</sup>、「所」などの機構論<sup>(52)</sup>、写経所文書からわかる法華寺・石山寺、写経生や下級官人の実態解明<sup>(54)</sup>、写経所の財政<sup>(55)</sup>、表裏関係からみた写経所文書の伝来論<sup>(56)</sup>、正倉院文書の「整理」や写本の研究<sup>(57)</sup>、流出文書の研究<sup>(58)</sup>、写経用品を丁寧に探求した研究などがある<sup>(59)</sup>。

ここにあげた研究は、史料への接近方法が個別写経事業研究のそれとは少し異なる。写経事業ごとに関係帳簿を整理して分析するのではなく、テーマが先にあり、それに沿って史料に接近していく方法によっている。この点はさほど留意しなくてもいいと思われるが、③で述べた新しいテーマ



は、このようなテーマ先行型のアプローチではなかったから「発見」されたものではないかと私は考えている。

## ⑤……………古文書学の見直し—古代古文書学・史料学の構築—

写経所文書が事務帳簿や伝票であることから、従来の公式令に根ざした古文書学は見直さなければならぬということが、新しい潮流の始まりとともに提唱されてきた。そしてこの分野は、古代史料の原本調査を専門とする杉本一樹と石上英一の2人によって大きく前進した。

### (1) 杉本一樹の古代古文書学<sup>(60)</sup>

杉本は、佐藤進一の機能論<sup>(61)</sup>から議論を出発させ、写経所文書を見る限り、機能論的には文書と帳簿は区別できず、当時の用語でも「公文」と一括していたと指摘する。その上で、「公文」はそれが置かれた「場」で機能するので、写経所に置かれた「公文」は写経所の仕事に即して分類するのが最適だとする。写経所なので、中心に「経巻の書写」という仕事があり、その周縁に写経所で働く労働者の労務管理の仕事と、写経所という機構運営の仕事と、大きく3つに区分する。中心の仕事を入れ替えれば、他の官司にも応用できるとする。そうして示した図は、写経所文書にはどんなものがあるかを一目瞭然に示すものとして有効であり、このような捉え方自体も定着してきている。

一方、古文書学の形態論に即した分析<sup>(62)</sup>も、直接正倉院文書に触れる調査者だからこそわかる様々な実態を多数紹介しつつ、出雲国計会帳にみえる助数詞の違いにも注目して「卷子」(巻)と「一紙もの」(張)の二分法が当時の認識としてあったことと、この2つは実態からみても明瞭な違いがあることを示した。

杉本の古代古文書学の議論は、様式論・機能論・形態論といった従来の古文書学の枠組みから出発している。それは従来の古文書学との関係性を保つためといえよう。しかし、正倉院文書に限定した議論であるため、古代の一次史料のうち1つの柱である木簡等の出土史料も含めた古文書学として練り上げる必要があるのではないか。その点は山口英男が木簡と正倉院文書の両方を見据えた議論を試みている<sup>(63)</sup>。また私も佐藤進一の「文書と記録の間」に存在する書面(帳簿・証書・記名札)と写経所文書との共通点から出発して、帳簿とは何か、何を機能とする書面かを論じたことがあった<sup>(64)</sup>。これらの写経所の帳簿に着目した議論は、中世の史料論にも注目される<sup>(65)</sup>ところとなり、最近の文字資料論には「帳簿」という項目が設けられる<sup>(66)</sup>ほどに、一定の理解を得るものとなった。

杉本の機能論は、結果として「公文」(史料群)の分類に役立つ議論となった。ここでいう「機能」は、1点1点の文書や帳簿の具体的な働き(機能)という意味ではない。個々の文書や帳簿は、たいていの場合、作成から保存までの間に、複数の働き(機能)を持っている。追記や合点などの痕跡や、保存の仕方や二次利用のされ方までが、個々の史料の働き(機能)を分析する手がかりとなる。このレベルでの働き(機能)をもカバーして、史料を普遍的にとらえる方法を理論化したのが、次の石上英一の史料学である。

---

## (2) 石上英一の日本古代史料学<sup>(67)</sup>

石上の史料学は、史料体論・テキスト構造論・歴史情報伝達行動論を体系化した理論である。「日本古代」を冠してはいるが、日本史の他の時代や東アジアの史料にも応用できる普遍性をもつ。数式もとりこみながらの理論化は、異論をはさむ余地のないほど精緻で正確であり、「石上の史料学にあてはまらない史料はない」といっても過言ではない。その内容はここでは触れないが、石上の史料学について、正倉院文書研究の長年の論客でもある東野治之は、「意欲的で真摯な成果」と評価する一方で、これが研究者全体の共有に至っていないことを問題とした<sup>(68)</sup>。その理由として、史料のもつ複雑な性格が影響していると指摘し、モノとしての側面を重視すればするほど、史料の情報を一般化したり数値化したりすることは困難であること、また個々の史料の特色に対処するには経験的な素養が重要となるが、それは最も客観化しにくいものであることをあげている。東野は、あくまで個々の具体例に即した「史料批判」を徹底し、その上で史料を利用する立場を貫くとする。

新たな研究手法の導入により、正倉院文書のもつ特質（事務帳簿であるということ）が判明すると同時に、従来の古文書学があてはまらないことに違和感を覚え、古文書学の見直しを迫ることになった。だが、そもそも従来の古文書学は何のためにあったのか、何のためにつくる必要があるのか、そうした原点こそ、見据えなければならないのではないか。石上の著書と同じ書名を用いた東野の意図も、そこにあったと思われるのである。

## (3) 「口頭伝達の文字化」という視点

古代古文書学の見直しの必要性は、写経所文書が事務帳簿であるという観点よりも早く、口頭伝達の文字化という視点からも唱えられた。その流れは、写経所文書や木簡に見られる公式様文書にはあてはまらない文書様式に着目した早川庄八の研究を嚆矢とする<sup>(69)</sup>。他者への伝達を機能とする文書だけに注目しても、公式令を土台とした古代古文書学では、古代の多様な文書のほんの一部しかカバーできない。

さらに、吉川真司が写経所文書を素材に、奈良時代の文書にみえる「宣」が口頭での指示であり、「判」でもあることを明らかにし<sup>(70)</sup>、それを受けて早川はさらに、佐藤進一の機能論を軸とした古文書学にも意欲的に取り組んだ。それが『宣旨試論』である<sup>(71)</sup>。早川は、いわゆる公家様文書といわれる宣旨や御教書・奉書等（またはその原型）が、写経所文書中にすでに存在し、公式様文書とは全く異なる次元の文書様式が存在、その変化・発展を論じた。同様の議論は、佐々木恵介も、写経所文書中にみられる「貢進文」を例に論じている<sup>(72)</sup>。

このように、公式様文書から公家様文書へという従来の古文書学の定説は、全面的見直しを迫られている。写経所文書にみられる奈良時代の文書様式の実態と公式令の影響とのせめぎあい、公式令にない様式が公家様文書にどのように継承されるのかなど、古文書学のレベルをおしあげる素材は、写経所文書や木簡等の一次史料のなかにたくさんある。これとは別に、文書の中に痕跡を残す口頭伝達のあり方、帳簿に見られる事務処理上の口頭伝達の実態についても<sup>(73)</sup>、写経所文書は様々な事例を提供するであろう。

## ⑥……………写経所文書の仏教史的分析へ—1990年代半ばからの動向—

柴原は、2000年頃までに写経事業と政治史との関係解明がある程度進められたが、それらには「ややストレートな感」があるとし、その一方で1990年代半ば頃から写経の意味を問う研究動向が芽生え、写経所文書の性質上これは当然の帰結であると述べている。<sup>(74)</sup>

この方面に先鞭をつけたものに、写経事業を指導する僧侶に焦点を当てた宮崎健司の研究や、後写一切経の個別写経事業研究をもとに、一切経の雑帙構成を丁寧に復原して、開元釈教録と比較した大平聡の研究などをあげることができる。雑帙のくりに注目する大平の視点は、奈良時代の一切経の中身を知る上で重要であり、その後の一切経や經典群の研究に大きな影響を与えた。私もこの視点到に学び、五月一日経の構造や、五月一日経を「創出」した史的意義を論じた。<sup>(75)</sup>

また、皆川完一が正倉院文書研究会で報告した五月一日経の重跋については、その後、大平と宮崎が善光朱印経との関連で論じた。<sup>(76)</sup> 勘経という、従来仏教学以外では知られていなかった經典完成後の校訂作業を明るみに出した意義は大きく、その後私も皆川のご教示を受けて、大平・宮崎の研究を全面的に再検討した。<sup>(77)</sup> その結果、皇后宮職系統写経機構は、場所を皇后宮から東大寺に移して造東大寺司管下の東大寺写経所に結実する系統のほかに、皇后宮内にも写経を行う部署が存在し続け、光明の死後に法華寺の嶋院写経所として整備されていく系統が存在するをつきとめた。<sup>(78)</sup>

内裏系統の写経機構に注目した柴原は、神護景雲一切経についても勘経が行われた事実を明らかにした。<sup>(79)</sup> 五月一日経の勘経のテキストとなった図書寮経の実態についても、明らかになったことがたくさんある。<sup>(80)</sup>

さらに、鬼頭清明が写経所文書中の「布施勘定帳」によって論じた南都六宗論についても、その後黒田洋子が雑帙構成の視点を取り入れて分析し、中林隆之によって南都六宗の全体像がかなり具体的に解明され、この分野は著しい研究の深化を遂げた。<sup>(81)</sup> 花嚴衆については、私も寺院社会論の視点から論じたことがある。<sup>(82)</sup> そのほか、山本幸男の華嚴経講説に関する諸論考、<sup>(83)</sup> 古代の法会体系、鑑真や良弁や慈訓といった著名な僧についての研究も進められてきた。<sup>(84)</sup>

写経所文書研究はもはや、古代仏教史の研究において不可欠のものとなり、平安仏教史や中世仏教史からも注目されてもいる。<sup>(85)</sup> このように関心が高い分野でありながら、古代仏教史プロパーの研究者の目にとまることがあまりないのはなぜか。写経所文書の「壁」が意識されているのであれば残念なことである。<sup>(86)</sup> そのような中で、榎本淳一が仏典将来の視点から玄昉将来経に注目した論考が出、今後の動きに期待したい。<sup>(87)</sup>

古代史の立場から、写経所文書研究を進めた結果としてこうした仏教史的テーマにも挑んできたが、やはり仏教思想の中身にまで深く入り込んでの考察は難しく、歴史学の側だけでは限界があると、柴原は指摘する。<sup>(88)</sup> 柴原は、きわめて基本的な、写経の意味を問う研究が十分ではないという。<sup>(89)</sup> 写経の意味を問うとは、何のために写経するのか、ある經典（あるいはセット）が選ばれた理由、完成した写経を講説・転読する意味や各所に安置する理由、写経を通じて王権が実現しようとしたことの宗教的・思想的背景は何か等々である。ここに仏教学・仏教思想史的分析が加われば、写経所文書研究はもっと深化し、奈良時代仏教史ももっと豊かになるにちがいない。古代史研究者の

側からは、仏教学を自ら学んで仏教学的素養を身につけ、この限界を克服する試みも、中林隆之や山本幸男によってすでに始められている<sup>(96)</sup>。中林は、写経所文書中の經典目録に注目し、その編成のあり方から古代仏教の中身の変化を追究する研究も始めて<sup>(97)</sup>いる。

## ⑦……………他の学問分野との関係—2000年頃から—

正倉院文書研究は、初期の頃から建築史・美術史・仏教史等、他分野の研究者がそれぞれの学問的課題に向かって切磋琢磨していたように、現在も歴史学以外の研究者が大いに注目し、写経所文書研究に参入してきている。

### (1) 国語・国文学の写経所文書研究<sup>(98)</sup>

まず国語学（日本語学）・国文学分野の動向を見ていくと、写経所文書はかつては一次史料として認められつつも、内容的な問題、つまり写経所という「特殊」な機構の史料であることから敬遠されていた。それを覆すきっかけになったのは、1980年代終わり頃からの長屋王家木簡・二条大路木簡の発見であり、それにとまなう漆紙文書等も含めた出土史料への着目であった。記紀万葉の研究の補助資料としてこれらが使われはじめてまもなく、「単に文字列だけを見るのではなく、必ず原本の写真にあたれ」という注意が喚起されるようになった。同じ時期に正倉院文書の研究環境が改善され、特に『正倉院古文書影印集成』（八木書店）の刊行によって写真が普及し、同じ奈良時代の一次史料として正倉院文書が国語資料として使われ始めた。初めは戸籍・計帳の人名表記や助数詞の資料、そして宣命体から仮名発達史の資料として利用された。

2000年頃から、「文字」をテーマとする学際的なシンポジウム<sup>(99)</sup>の開催、歴博の特別展「古代日本文字のある風景」<sup>(100)</sup>、吉川弘文館からの『文字と古代日本』シリーズの刊行（2004～2006年）などが相次いだ。歴史学と国語学の共同研究の場でもあり、これが正倉院文書の中心をなす写経所文書への着目の転換となった。1990年代から正倉院文書に注目していた桑原祐子は、自ら歴史学としての写経所文書研究に挑み、写経所文書を分析して多くの成果を発表してきた。桑原を先頭に、次第に写経所文書を国語学・国文学の資料として使う研究者が増え、国語学の写経所文書研究論文も徐々に増えてきた現在、写経所文書は国語学の研究対象として市民権を獲得したといえる。犬飼隆は、正倉院文書は日常語を反映しており、平安時代語へ連続する面を持つと積極的に評価し、期待を寄せる。その一方で、それでも文献としての性格上、日本語文の考察には利用しがたいとも指摘<sup>(101)</sup>する。

<sup>(102)</sup>桑原祐子は、正倉院文書の日本語資料としての特質として、「1 原本が存在する。2 編纂物ではない。3 多種多様な内容をもつ。4 同類の文書・帳簿が多量に存在する。5 文書作成のための下書きが段階的に残っている。6 筆録者が特定できる。7 筆録の年月日が特定できる。8 表現の相手・目的・場が明確である。9 人間の動き、物の動きを追うことができる」の9点をあげる。内容が写経事業や寺院造営であるという点さえ克服できれば、奈良時代語をこれほどリアルに分析できる資料はほかにはなく、「日本語文の考察には利用しがたい」という犬飼の指摘を逆手にとれるのではないかと。桑原が例として述べた、ある官人の言語生活を通史的に検討すれば、書き癖や創意工夫も分析でき



るという点は、かつて大平聡が研究した人名表記論や帳簿論にも通じる。また、桑原のいう踊り字や省文などが文字表記における「正式と略式」「聖と俗」の意識を研究できるという点は、後述する書道史的研究とも共鳴する問題意識といえよう。

現在は、桑原を中心に写経所文書の訓読の共同研究と、史料の写真と注釈を付けた報告書の公表がさかんである。ここには歴史学の研究者も参加しており、1点の史料をどう読むかについては、<sup>(103)</sup>周辺史料の歴史学的検討を可能な限り動員して訓むというスタンスをとっている。また、2007年6月から、柴原永遠男の呼びかけで、天平宝字2~8年の写経所文書および造石山寺所文書に残る解移牒符案を訓む研究会（解移牒会）が始まった。歴史学と国語学・国文学の研究者が一緒に集い、1字1句余すところなく訓み解釈する作業は多大な時間を要し、2014年5月で72回めとなる。国語学研究者のなかには、写経所文書はそもそも声に出して読まれたものではないとして、訓読すること自体を疑問視する議論もあるようだが、<sup>(104)</sup>積読の難しさに悩まされる歴史学研究者にとって、1文字もおろそかにせず意味をしっかりと取りながら、同時代の用例を総動員して訓む国語・国文学者の姿勢には、学ぶべき点がたくさんある。

## (2) 芸術学・考古学・建築学などの分野

次に、書道史の立場から手実の分析に切り込んだ加藤豊恒<sup>(105)</sup>の研究を取り上げたい。書体が筆録者の心性を表現しているという視座で分析した研究である。写経という緊張を強いられる厳粛な仕事を終えた後に書かれる手実には、緊張感から解放され、自由に思いを表現でき、奔放な書きぶりさえ現れていると加藤は論じる。そして手実は自由な書体で書いてもよいという事務官との共通理解・信頼関係があることを指摘する。このような見方は歴史学の側からは発想しえないもので、新鮮に感じるのは私ばかりではなかろう。しかし、先に国語学的分析のなかでも触れたように、文字の書きぶりに、緊張と解放という構図以外にもハレとケや「正式と略式」という構図が見て取れることも考慮しなければならない。写経に比べれば手実は、必要事項が書かれていることが重要な要件であって、書体も書式も人によってまちまちであり、自由度が高いことは確かである。だが、緊張から開放された経師が、「自由な表現へのたぎり」から自分の名前を奔放な書体で書いたと結論するのはどうか。そもそも端正に正確に文字を書くことが仕事である経師は、現代的な意味での表現者なのであろうか。私は、このテーマを研究するのであれば、手実の文書論的な特質や多数の事例、あるいは写経生の手実に対する認識を多方面から分析して、総合的に論じる必要があると感じる。

一方、同じ書道史研究者でも、客観的事例を多数提示し、説得力に富む論考を発表しているのが川上貴子<sup>(106)</sup>である。川上のテーマは、国家珍宝帳の書体や、善光寺朱印経のような大字写経の書体がどのようにして生まれたか、というものである。写経所文書そのものの書体を論じたものではない。むしろ、近年の歴史学側の写経所や写経事業の研究成果を積極的に取り入れようとする立場である。成果を取り入れるだけでなく、自分で検証するためには、自らも写経所文書を扱わねばならないことも認識しているようである。川上の研究テーマは、杉本一樹<sup>(107)</sup>の書体論に刺激を受けただけであって、歴史学とは問題意識が近い。また、現存古写経と写経所文書は、そもそも切っても切れない関係である。その意味でも川上の研究により、この分野の研究の進展には期待がもてる。

このように、写経所文書のなかには、現存する奈良時代の文化財と共鳴する内容をもつものも少

なくない。東大寺法華堂の仏像や、当時の仏師国中君麻呂について、美術史の彫刻分野からアプローチした研究もある。<sup>(108)</sup>2012年の正倉院文書研究会では絵画史の立場から上楯麻呂を論じた報告があった。<sup>(109)</sup>歴史学者は、これらの成果に学び、造東大寺司の活動に新たな知見を加えることができるかもしれない。また、東大寺の前身寺院や法華寺阿弥陀浄土院については、現地踏査や発掘調査などの新しい考古学的調査研究がある。<sup>(110)</sup>これらは写経所文書研究の成果を考古学の立場から再検討したものである。建築史からも様工についての新しい論考が出されており、<sup>(111)</sup>写経所文書の最新成果に触れてはなかったが、福山敏男以来受け継がれてきたテーマの1つが建築史の分野でも生き続けていることを知った。

このように、現在は、写経所文書を中心に置いて、われわれ歴史学者と、国語・国文学、美術史学（書道・絵画・彫刻）や考古学、建築史学などの多様な方面の研究者が共通の関心を持ち、同一のテーマで議論できる土壌ができつつある。そこに仏教学の専門家が加われば鬼に金棒といったところだろう。多数の分野の研究者が集い、研究交流する場として、正倉院文書研究会がもっと活用されることが望ましい。歴史学以外の研究者にも委員になってもらうなど、門戸を広げる積極的な働きかけも必要かもしれない。と同時に、他分野の研究者が読むことを前提に、歴史学の側でも、用語やわかりやすさに配慮することがますます重要になるだろう。

こうした他分野の研究者による写経所文書を使った研究には、勢いや活気が感じられ、私たちにあって大きな刺激となっている。いずれの分野にしる、共同研究や研究交流の場が確保されなければならない。こうした研究者と時間・空間を共有して議論することで、お互いの成果をキャッチボールすることができれば、大きく前進することができるだろう。仏教学の研究者も含めて、ぜひ一緒に議論できることを望みたい。

## ⑧……………歴史学分野の最新動向と課題—まとめにかえて—

以上、約30年間に及ぶ写経所文書研究の流れを追ってきた。基礎研究としての個別写経事業、写経機構、写経所文書の構造など、概略はおおた把握されてきたというのが榮原の見解であり、<sup>(112)</sup>異論はない。それらの成果公表も多様な形で進められてきた。SOMODAの改訂が現在進行中である。問写経以外の一切経も含め、「複合帳簿」の記載箇所も示した完成度の高いデータベースの作成が目指されている。『目録』や『正倉院古文書影印集成』が順次刊行されるにつれ、続々修の全体像も徐々に姿を現すであろう。刊行途中の現在でも、正倉院事務所の飯田剛彦と西洋子が進めている調査などが、<sup>(113)</sup>復原の新たな手がかりとして有効となり、写経所文書研究の精度もレベルアップしてきている。速度はゆっくりでも、徐々に研究環境が充実していくことは間違いない。

### (1) 写経所文書研究の普及

このように30年前に比べれば、写経所文書は格段に扱いやすくなったことは確かであるが、研究者の間口を広げる必要があると感じた遠藤慶太は、写経事業復原の手法を具体的に解説すること自体を目的とした覚書を<sup>(114)</sup>発表した。そして2011年、榮原も初の研究入門書を<sup>(115)</sup>上梓した。写経所文書の研究手法を普及するというベクトルはこれまでになかったもので、最新動向として特筆しておきたい。

1988年から続いた栄原の正倉院文書ゼミは、2012年度で終了し、関西における正倉院文書ゼミが姿を消した。「古今伝授」と栄原が言う正倉院文書研究にとって、関西で研究手法の手ほどきを受け、共同で逐一史料の検討をできる場を失うのは大きな痛手である。だが、そもそも古代のどのような史料であれ、それを使いこなそうとすれば、何らかの手ほどきが必要である。独学では難しい。そういった意味での「古今伝授」は、別に正倉院文書に限ったものではない。そう思えば、あとは必要な研究環境さえ確保できれば、栄原の入門書を手引きとして挑戦するのも、そう特別なことではない。正倉院文書の「古今伝授」克服への足がかりとして、この入門書は大きな役割を果たすであろう。

私もう1つ必要だと感じるのは、個別写経事業をまとめた一書、そして写経機構や造石山寺所について解明されている範囲でまとめた解説書である。この写経所で行われた写経事業の主だったものを総合的にとらえた総論を付さねばならないだろうが、専門書というより、普及を目的とした一般書でそうしたものがあれば、写経所文書研究のイメージがかなり具体的に伝えられるのではないか。

## (2) 海外の研究者からの注目

このように写経所文書研究の研究手法や基礎研究の普及を強調するのは、日本古代史の学界だけを射程にしているからではない。他の学問分野の研究者と、さらには海外の研究者への広がりも見通しているからである。正倉院文書研究会でも2007年には「正倉院文書の国際的・学際的利用」と題して、他の研究グループと共催の国際シンポジウムが開かれた。この時は韓国とフランスの研究者が報告した。2012年、アメリカのプリンストン大学に栄原が招かれて1週間にわたり正倉院文書の講義を行った。

韓国では、歴史学の専門家とともに、韓国語学研究者や経典の調査研究者の熱い視線が正倉院文書に注がれている。この「正倉院文書の高度情報化」グループが、2011年に韓国中央博物館でのシンポジウムで報告を行った。2012年にも栄原・鷺森と私が、「新羅写経研究」プロジェクトチームの要請を受けて、2日間の研究会で講演した。いずれも事前に原稿化したものがハングルに訳されて製本された状態で、当日参加者全員に配布される。2013年には、この研究チームの成果の全体が出版されることになり、私たちの報告もこの本に収録されることになった。栄原の入門書は日本<sup>(116)</sup>で出版された翌年の2012年に韓国語版が出版され、<sup>(117)</sup>韓国の新聞で報道された。いま韓国では「日本の正倉院文書は、日本だけのものではなく世界のものだ」と認識され、同じく韓国で注目を浴びている日本の木簡とともに、正倉院文書、特に写経所文書への関心が高まっているのである。その内容が仏教、律令制といった東アジアに共通すること、現存する新羅の古写経への理解を深めるものとして有用であることなどが、歴史学や韓国語学の研究者を引きつけてやまないであろう。この「新羅写経研究」プロジェクトでは石田茂作の著作の翻訳研究も行っており、最近の研究動向との比較、つまり研究がどのようにどれだけ進んだかを検証する研究計画があるという。また、韓国と日本の語学的比較研究も、現在注目されている。この人間文化機構の「正倉院文書の高度情報化」連携研究で、正倉院文書（複製）の写真がウェブで見ることができるようになれば、国内の研究者だけでなく、海外の研究者の研究環境整備に大いに貢献できるだろう。

### (3) 周辺史料の調査研究

最近の研究動向としてもう1つあげたいのは、写経所文書の周辺史料の調査研究、とりわけ現存古写経そのものの調査研究と成果公表である。なかでも最大の成果は、東大寺聖語蔵経巻の全巻写真カラーCD-Rの刊行であらう。<sup>(118)</sup>角筆の判読は難しいと思われるが、墨書や朱書、貼り紙、印等であれば、十分調査できる。正倉院事務所の飯田剛彦は、このCD-Rにより、聖語蔵のいわゆる「神護景雲経」として伝来されてきた一群の経巻705巻について、巻末背書と写経所文書とを照合させる作業を綿密に行った。その結果、景雲経は4巻だけで、あとは大半が宝亀年間の奉写一切経所（東大寺写経所）で写された五部一切経（うち今更一部639巻）であることを明らかにした。<sup>(119)</sup>同様に、藤田美術館蔵の大般若経についても巻末背書を調査した奈良国立博物館の野尻忠が、やはりこれを五部一切経（先一部）の僚巻であることをつきとめた。<sup>(120)</sup>こうした巻末背書と写経所文書の照合は、早く1963～65年に、松本包夫が聖語蔵の五月一日経について調査したことがあったが、これも未完である。巻末背書への注目自体が意識されてこなかったが、私の調査によれば、写経所文書の中に、経巻の装書の際に切り落とされた巻末背書部分が、背面を二次利用されたりして残存しており、写経所文書との関係は深いのである。巻末背書を活字化した資料集も作成する必要があるが、このような場合にCD-Rが大いに役立つ。そして、何と言っても書道史研究者にとってこのCD-Rが発揮する力は計り知れないのではないか。ただあまりにも高額なため、大学の図書館などでも購入は難しいという難点があることは拭えない。

東大寺は聖語蔵とそれ以外の經典についても2005年から調査成果を公表しはじめ、<sup>(122)</sup>新見解も見られるようである。このような調査は、今後、古写経の各所蔵者や所蔵機関にも影響を与えるであらう。すなわち、古写経の調査には經典全ページのデジタル写真化と、巻末背書や印影なども含めた調査が標準とされ、それらが公表されれば、古写経研究も前進するに違いない。前述したように、いま日本の古写経は韓国の研究者の注目を集めており、この方面の需要はかなり高いといつてよい。

同様に、野尻忠が調査した丹裏裏文書の調査や、<sup>(123)</sup>正倉院事務所で進められている文書の断片の調査も貴重である。<sup>(124)</sup>

### (4) 歴史学にとっての課題

最後に、歴史学研究者に固有の課題について述べる。栄原も指摘するように、基礎研究の充実や周辺史料調査や国語・国文学の訓読研究などによって、最近の写経所文書研究はより正確な解読、より精緻な分析が可能になってきた。あらゆるアプローチを駆使して可能な限り当時の実態に接近する。それが現在の写経所文書研究に求められるべき水準である。この精度で、写経所文書、造石山寺所関係文書をくまなく調べ分析しつくすには、まだできることが膨大に残っている。それはたとえば、皆川ゼミ以前の研究をもう一度現在の水準で再検討するとどうであるか、といった類のものもあれば、まだだれも気がついていない新たなテーマを「発見」する可能性もある。帳簿論や問写経の総合的研究、五月一日経の全体像と同時期の問写経群の基本的事実関係もいまだまとめられていない。写経工程や事務処理の具体的実態も、「なんとなくこうだろう」と思っていることが本当かどうか、疑ってみる余地もある。写経生以外の労働力についても、写経所文書はまだまだ豊富



な実態を物語るだろう。

1980～90年代の2つの大学のゼミ生の第一世代がつくってきた研究の勢いからみれば、現在は穏やかといえるかもしれない。研究者の減少も指摘されている。しかし、若い研究者の登場や、意気盛んな他分野の研究成果、そして海外の研究者の熱意などに刺激を受け、写経所文書研究は、ゆるやかでも着実に発展していけよう。おりしも、最新の『正倉院文書研究』13号(2013年)の内容も多彩かつ深まりを感じさせる論考が並んだ。また、写経生も含めた古代下級官人像の従来イメージを再考を促す市川理恵の意欲的研究<sup>(125)</sup>に、今後の正倉院文書研究の一層の深化発展を予感するのは私だけであろうか。私たちは、いま置かれている研究環境のなかで、最大限、写経所文書を利用しつくすべきであろう。現在のような研究環境がまったくなかった時代に、写経所文書に果敢に挑んだ先学の姿勢に、私はもう一度学びたい。

本稿は私自身の関心にかなりかたよった研究動向であり、漏れ落としている研究も少なくないと思う。その点をお許しいただくとともに、ご教示いただければ幸いである。

## 註

- (1)——2004年までの研究文献については栄原永遠男「正倉院文書関係文献目録(1)～(4)」(『正倉院文書研究』1・2・3・10, 1993・94・95・2005年)が網羅しているので参照されたい。
- (2)——本稿は、次にあげる論考を土台として、私なりにまとめた部分がかかなりある。いちいち断らないが、ぜひ参照されたい。大平聡「正倉院文書研究試論」(『日本史研究』318, 1989年)。栄原永遠男「正倉院文書研究の課題」(初出1993年、のち栄原『奈良時代の写経と内裏』塙書房, 2000年所収)。栄原永遠男『正倉院文書入門』(角川学芸出版, 2011年)。『正倉院文書研究』1～13(1993～2013年)の編集後記。
- (3)——註(2) 栄原『正倉院文書入門』。
- (4)——東京大学史料編纂所編『正倉院文書目録』1～現在6まで(東京大学出版会, 1987年～2010年)。
- (5)——詳細は本報告書の栄原報告を参照されたい。
- (6)——東大と大阪市大以外にも、国学院大学の林陸朗ゼミや日本女子大の勝浦令子ゼミでも写経所文書のゼミが行われていた。
- (7)——西洋子「造石山寺所解移牒符案の復原について」(関見先生古稀記念会編『律令国家の構造』吉川弘文館, 1989年)、西「食口案の復原(1)(2)」(『正倉院文書研究』4・5, 1996・97年)。
- (8)——註(2) 栄原「正倉院文書研究の課題」。
- (9)——藪田香融「南都仏教における救済の論理(序説)——写経の研究——」(日本宗教史研究会『日本宗教史研究』4 救済とその論理』法蔵館, 1974年)。
- (10)——註(2) 栄原「正倉院文書研究の課題」。
- (11)——註(2) 大平「正倉院文書研究試論」。
- (12)——王権や国家論、政治史に関連させた個別写経事業の論考は、栄原永遠男「難波之時御願大般若経について」(『大阪の歴史』16, 1985年)や大平聡「天平期の国家と王権」(『歴史学研究』599, 1989年)をはじめ、あげれば枚挙にいとまがないので割愛する。なかでも天平宝字期の仲麻呂政権との関わりで論じたものが多いが、これは、皆川ゼミ以前の研究にも同様の傾向がみられる。またこの写経所が皇后宮職系統であることから、光明子の人生の節目に行われた写経事業についての論文も多い。
- (13)——「正倉院文書写経機関関係文書編年目録」(『東京大学日本史学研究室紀要』3～14, 1999～2010年)。
- (14)——現在、一切経も含めたSOMODAの全面的改訂作業を行っている。
- (15)——註(2) 大平「正倉院文書研究試論」、註(2) 栄原「正倉院文書研究の課題」。
- (16)——大平聡「写経所手実論序説——五月一日経手実の書式をめぐって——」(皆川完一編『古代中世史料学研究』上, 吉川弘文館, 1998年)。大平「写経事業と帳簿」(石上英一・加藤友康・山口英男編『古代文書論——正倉院文書と木簡・漆紙文書——』東京大学出版会, 1999年)など。大平は帳簿論構築のために、後写一切経の作業工程モデル(註(2) 大平「正倉院文書研究試論」や帳簿形式の4類型(註(29) 大平「『三人』の写経生」)を提示している。
- (17)——山下有美「正倉院文書研究における帳簿論——宝

亀年間の写経所の帳簿管理技術一」(『民衆史研究』58, 1999年)。風間亜紀子「文書行政における告朔解の意義」(『正倉院文書研究』10, 2005年), 市川理恵「宝亀年間の布施申請解案の考察」(『正倉院文書研究』12, 2011年)など。

(18)——大平聡「正倉院文書の五つの『絵』—佐伯里足ノート—」(『奈良古代史論集』2, 1991年)。山本幸男「正倉院文書にみえる『鳥の絵』と『封』—写経所案主佐伯里足の交替実務をめぐって—」(『続日本紀研究』280, 1992年)。

(19)——註(2) 栄原『正倉院文書入門』第四章の2。

(20)——註(18) 山本「正倉院文書にみえる『鳥の絵』と『封』」。

(21)——野尻忠「続修正倉院古文書第五巻の習書—写経所文書の表裏関係—」(『鹿園雑集』11, 2009年)。

(22)——渡辺晃宏「金光明寺写経所の研究—写経機構の変遷を中心に—」(『史学雑誌』96-8, 1987年)。

(23)——大隅亜希子「装演組織の展開と布施支給の変遷」(『正倉院文書研究』6, 1999年)。

(24)——山下有美『正倉院文書と写経所の研究』(吉川弘文館, 1999年)。

(25)——大平聡「写経所の帳簿より見た賃金支給システム」(『官営工房研究会会報』2・3合併号, 1995年)。大隅亜希子「天平勝宝二・三年の寿量品四千巻書写について—関連帳簿の分析を中心に—」(『南都仏教』76, 1999年)。岩宮隆司「天平勝宝元年の大般若経書写について—写経作業と布施支給作業を中心に—」(『続日本紀研究』346, 2003年)。註(17) 市川理恵「宝亀年間の布施申請解案の考察」。

(26)——山下有美「校経における勘出・正書の実態と布施法」(『正倉院文書研究』13, 2013年)。

(27)——栄原永遠男「都のくらし」(直木孝次郎編『古代を考える 奈良』吉川弘文館, 1985年)。栄原「平城京住民の生活誌」(『日本の古代9 都城の生態』中央公論社, 1987年)。

(28)——大平聡「宴開いて水に流して—写経所職員の共同体意識—」(『奈良古代史論集』3, 1997年)。大平「宝亀二年閏三月の二通の過状」(『水門』21, 2009年)。

(29)——大平聡『三人』の写経生—天平期写経所における人名表記についての一考察—」(『桐朋学園大学研究紀要』13, 1987年)。大平「秦姓弟兄と秦姓乙安」(西洋子さん還暦記念論集刊行会編『洋洋福寿』2004年, のち西洋子・石上英一編『正倉院文書論集』青史出版, 2005年)。

(30)——田中大介「写経所文書に現れる『道守』について—古代人名論への視座として—」(『続日本紀研究』339, 2002年)。

(31)——註(2) 栄原「正倉院文書研究の課題」。

(32)——栄原永遠男「天平六年の聖武天皇発願一切経—写経司と写一切経司—」(初出1994), 栄原「内裏における勘経事業—景雲経と奉写御執経所・奉写一切経司—」(初出1995年), 栄原「写御書所と奉写御執経所」(初出1996年), いずれものち註(2) 栄原『奈良時代の写経と内裏』に所収。

(33)——栄原永遠男「北大家写経所と藤原北夫人発願一切経」(初出1995年), 栄原「藤原仲麻呂家における写経事業」(初出1999年), いずれものち栄原『奈良時代写経史研究』(塙書房, 2003年)所収。栄原「佐保宅の性格とその写経事業」(註(29)『正倉院文書論集』)など。

(34)——福山敏男「奈良朝に於ける写経所に関する研究」(初出1932年), 「再び奈良朝に於ける写経所に就いて」(初出1935年), いずれものち『福山敏男著作集2 寺院建築の研究 中』(中央公論美術出版, 1982年)所収。1930年代に書かれた興福寺西金堂・法華寺・石山寺造営関係の論文(福山『日本古代建築史の研究』桑名文星堂, 1943年所収, 1980年に綜芸舎より復刻)など。

(35)——石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教史の研究』(東洋文庫, 1930年, 1982年に原書房より復刻)。

(36)——堀池春峰「金鐘寺私考」(初出1948年)など, 堀池『南都仏教史の研究 上 東大寺篇』(法蔵館, 1980年)所収の論文。

(37)——井上薫「奈良時代写経所の一考察」(初出1960年, 井上『日本古代の政治と宗教』吉川弘文館, 1961年), 井上『奈良時代仏教史の研究』(吉川弘文館, 1966年)。

(38)——藤野道生「天平勝宝年間における将来経疏私考(1)(2)」(『弘前大学人文学部 文経論叢』5-5, 6-4, 1970・71年), 藤野「奈良時代における修多羅衆私考」(『弘前大学人文学部 文経論叢』12-4, 1977年)。

(39)——註(9) 藪田「南都仏教における救済の論理(序説)」。

(40)——栄原「奉写一切経所の写経事業」(初出1977年), 栄原「奉写一切経所の財政」(初出1979年) 栄原「奉写大般若経所の写経事業と財政」(初出1980年), いずれものち註(33) 栄原『奈良時代写経史研究』所収。

(41)——吉田孝「律令時代の交易」(初出1965年, のち吉田『律令国家と古代の社会』岩波書店, 1983年所収)。これを全面的に見直した栄原永遠男は2013年5月に大阪市立大学日本史学会で「正倉院文書の構造」と題する

口頭報告を行った。

(42)——山田英雄「奈良時代における上日と禄」(初出1962年),山田「写経所の布施について」(初出1965年),山田「律令官人の休日」(初出1978年)など、いずれも山田『日本古代史攷』(岩波書店,1987年)所収。

(43)——野村忠夫「律令制官人構成についての序章—秦常忌寸秋庭の場合—」(初出1954年,のち野村『律令官人制の研究』吉川弘文館,1967年所収)。野村『古代官僚の世界—その構造と勤務評定・昇進—』(塙新書,1969年),野村「他田水主についての一,二の考察—美濃国から出身した一下級官人—」(初出1972年,のち野村『古代貴族と地方豪族』吉川弘文館,1989年所収),野村『官人制論』(雄山閣出版,1975年)。

(44)——鬼頭清明『日本古代都市論序説』(法政大学出版局,1977年)所収の論文。

(45)——須田春子「大般若経書写に現われた仲麻呂・道鏡の相剋—特に天平宝字の写経を廻って—」(肥後先生古稀記念論文刊行会編『日本文化史研究』弘文堂,1969年),須田『律令制女性史研究』(千代田書房,1978年)所収の論文。

(46)——関根正隆『奈良朝食生活の研究』(吉川弘文館,1969年),関根『奈良朝服飾の研究』(吉川弘文館,1974年)。

(47)——皆川完一「光明皇后願経五月一日経の書写について」(初出1962年)。皆川「正倉院文書の整理とその写本—穂井田忠友と正集—」(初出1972年)。いずれも皆川『正倉院文書と古代中世史料の研究』(吉川弘文館,2012年)所収。この著書に収録されている皆川氏の卒業論文「奈良時代写経所に関する基礎的研究」(1952年)は、写経所文書研究の基礎的論文として、半世紀の間、公表されていなかったことが、今となっては残念でならない。

(48)——岡藤良敬『日本古代造営史料の復原研究—造石山寺所関係文書—』(法政大学出版局,1985年),岡藤『造石山寺所関係文書・史料篇』(『福岡大学総合研究所報』100別冊,1987年)ほか。森哲也作成の岡藤良敬著作目録(『正倉院文書研究』11,2009年)参照。

(49)——山下有美「正倉院文書を伝えた写経機構」(『正倉院文書研究』2・3,1994・95年,)。註(24)山下『正倉院文書と写経所の研究』所収。

(50)——中林隆之「律令制下の皇后官職」(『新潟史学』31・32,1993・94年)。鷲森浩幸「藤原光明子家に関する一史料」(『続日本紀研究』305,1996年)。

(51)——『続日本紀研究』誌上で展開された造東大寺司

成立論をめぐる若井敏明と渡辺晃宏の論争(『続日本紀研究』243・248・250・255・263,1986~89年)。註(24)山下『正倉院文書と写経所文書の研究』。中村順昭「造東大寺司の『所』と別当」(初出1998年,のち中村『律令官人制と地域社会』吉川弘文館,2008年所収)。

(52)——黒田洋子「正倉院文書の一研究—天平宝字年間の表裏関係からみた伝来の契機—」(『お茶の水史学』36,1992年),鷲森浩幸「八世紀の法華寺とそれをめぐる人びと」(『正倉院文書研究』4,1996年),渡辺晃宏「阿弥陀浄土院と光明子追善事業」(『奈良史学』18,2000年),風間亜紀子「天平宝字年間における法華寺金堂の造営—作金堂所解の検討を中心に—」(『正倉院文書研究』9,2003年)。

(53)——鷲森浩幸「天平宝字六年石山寺造営における人事システム—律令官司制の一側面—」(『日本史研究』354,1992年)。岡藤良敬「天平宝字六年,鑄鏡関係史料の検討」(『正倉院文書研究』5,1997年),岡藤「藤原『豊成』板殿・考」(『正倉院文書研究』10,2005年)。柴原永遠男「石山寺増改築工事の財政と銭貨」(『金融研究』24-1,2004年)。中村順昭「愛智郡封戸租米の輸納をめぐる郡司と下級官人」(初出2005年,のち註(51)中村『律令官人制と地域社会』所収)。矢越葉子「造石山寺所の文書行政—文書の署名と宛先—」(『正倉院文書研究』11,2009年)。鷲森「造石山寺所の給付体系と保良宮」(『正倉院文書研究』12,2011年)。

(54)——註(27)柴原永遠男「都のくらし」,『平城京住民の生活誌』。中村順昭「律令制下における農民の官人化」(初出1984年),中村「奉写一切経所の月借錢について」(初出1992年)いずれものち註(51)中村『律令官人制と地域社会』所収。山下有美「月借錢再考」(柴原永遠男編『日本古代の王権と社会』塙書房,2010年)。

(55)——市川理恵「二部般若経写経事業の財政とその運用」(『ヒストリア』226,2011年)。市川理恵「下級官人と月借錢—宝亀年間は一切経写経事業を中心に—」(『史学雑誌』122-6,2013年)。

(56)——註(52)黒田洋子「正倉院文書の一研究」。山本幸男「造石山寺所の帳簿に使用された反古文書」(皆川完一編『古代中世史料学研究』上,吉川弘文館,1998年)など。

(57)——西洋子『正倉院文書整理過程の研究』(吉川弘文館,2002年)。

(58)——国立歴史民俗博物館『正倉院文書拾遺』(便利堂,1992年)。大平聡「正倉院文書の偽文書」(『古代文化』45-3,1993年)。東野治之「『訪書余録』所載の写経生試字」

(初出1989年), 東野「写経生試字紙背の食口案断簡」(初出1990年), いずれものち東野『日本古代史科学』(岩波書店, 2005年)に初収。丸山裕美子「尾張名古屋の正倉院文書—庫外流出正倉院文書の行方—」『正倉院文書研究』13, 2013年。

(59)——杉本一樹「端継・式敷・裏紙」(初出1991年, のち杉本『日本古代文書の研究』(吉川弘文館, 2001年)所収。渡部陽子「『下纏』と『式』『敷』」(『正倉院文書研究』12, 2011年)。渡部陽子「正倉院文書にみえる帙」(『正倉院文書研究』13, 2013年)など。

(60)——杉本一樹「正倉院文書」(初出『岩波講座日本通史』4「古代」3, 1994年), 杉本「古代文書と古文書学」(初出1998年), いずれも杉本註(59)『日本古代文書の研究』所収。杉本「写経所文書」(『週刊朝日百科 皇室の名宝』05「正倉院 文書と経巻」朝日新聞社, 1999年)。杉本『日本の美術』440「正倉院の古文書」(至文堂, 2003年)。

(61)——佐藤進一「中世史料論」(初出1976年, のち佐藤『日本中世史論集』岩波書店, 1990年), 佐藤『新版古文書学入門』(法政大学出版局, 1997年, 旧版は1971年), 佐藤「武家文書の成立と展開」(『週刊朝日百科日本の歴史別冊 歴史の読み方』5「文献史料を読む・中世」1989年)。

(62)——杉本一樹「律令制公文書の基礎的観察」(初出1993年, のち註(59)杉本『日本古代文書の研究』所収)。

(63)——山口英男「帳簿と木簡—正倉院文書の帳簿・継文と木簡—」(『木簡研究』22, 2000年)。山口「文書と木簡」(石上英一編『日本の時代史』30「歴史と素材」吉川弘文館, 2004年)。

(64)——山下有美「文書と帳簿と記録—一定説的古文書学をめぐる諸問題—」(『古文書研究』47, 1998年)。

(65)——村井章介「中世史料論」(『古文書研究』50, 1999年, のち村井「中世史料との対話」吉川弘文館, 2014年所収)。

(66)——寺崎保広「帳簿」(平川南・沖森卓也・栄原永遠男・山中章編『文字と古代日本』1「支配と文字」吉川弘文館, 2004年)。

(67)——石上英一『日本古代史科学』(東京大学出版会, 1997年), 石上「集合文書と文書集合」(皆川完一編『古代中世史科学研究』上, 吉川弘文館, 1998年)。

(68)——東野治之『日本古代史科学』(岩波書店, 2005年)。

(69)——早川庄八「公式様文書と文書木簡」(初出1985年, のち早川『日本古代の文書と典籍』吉川弘文館, 1997年所収)。

(70)——吉川真司「奈良時代の『宣』」(初出1988年, のち吉川『律令官僚制の研究』塙書房, 1998年所収)。

(71)——早川庄八『宣旨試論』(岩波書店, 1990年)。

(72)——佐々木恵介「正倉院文書中の経師等貢進文について」(『正倉院文書研究』12, 2011年)。

(73)——大平聡は, 手実の「読」という追記や「マロ」の用字法から, 「一人が読み上げもう一人がそれを聞いて書く」事務処理方法が存在したと述べているが(註(25)大平「写経所の帳簿より見た賃金支給システム」, 大平「日本古代の文書行政と音声言語」藤田勝久・松原弘宣編『古代東アジアの情報伝達』汲古書院, 2008年ほか), この見解は検討の余地がある。しかし, 写経所の機構運営上, 口頭の指示は帳簿と同じくらい重要との杉本一樹の指摘がある(註(59)杉本「正倉院文書」)。

(74)——栄原による編集後記(『正倉院文書研究』4, 1996年)。

(75)——宮崎健司「天平宝字二年の写経—慈訓と慶俊をめぐって—」(初出1991年, のち宮崎『日本古代の写経と社会』塙書房, 2006年所収)。

(76)——1993~1994年度科学研究費補助金一般研究(C)研究成果報告書『正倉院文書と古写経の研究による奈良時代政治史の検討』(代表大平聡)1995年。

(77)——宮崎健司「開元入蔵録対照表」(初出2001年, 註(75)宮崎『日本古代の写経と社会』所収)。森明彦「奈良朝末期の奉写一切経群と東大寺実忠」(『正倉院文書研究』7, 2001年)。

(78)——山下有美「五月一日経『創出』の史的意義」(『正倉院文書研究』6, 1999年)。山下「五月一日経における別生・疑偽・録外経の書写について」(大阪市立大学『市大日本史』3, 2000年)。山下「嶋院における勘経と写経—国家的写経機構の再把握—」(『正倉院文書研究』7, 2001年)。

(79)——皆川完一「五月一日経の校勘について」(第1回正倉院文書研究会における口頭報告)。大平聡「善光朱印経の基礎的考察」(『神奈川地域史研究』6, 1987年)。宮崎健司「光明皇后発願五月一日経の勘経について」(初出1992年, のち註(75)宮崎『日本古代の写経と社会』所収)。大平聡「五月一日経の勘経と内裏・法華寺」(『宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研究年報』26, 1993年)。

(80)——註(78)山下有美「嶋院における勘経と写経」。

(81)——註(32)栄原「内裏における勘経事業」。

(82)——栄原永遠男「図書寮一切経の変遷」(初出1996年), 栄原「図書寮経の構成と展開」(初出1997年), い



- ずれも註(2) 栄原『奈良時代の写経と内裏』所収。
- (83)——鬼頭清明「南都六宗の再検討」(笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令論集』上, 吉川弘文館, 1993年)。
- (84)——黒田洋子「『布施勘定帳』の基礎的分析」(『正倉院文書研究』6, 1999年)。
- (85)——中林隆之『日本古代国家の仏教編成』(塙書房, 2007年)。
- (86)——山下有美「東大寺の花厳衆と六宗—古代寺院社会試論—」(『正倉院文書研究』8, 2002年)。
- (87)——山本幸男「天平十二年の『華嚴經』講説—金鐘寺・元興寺・大安寺をめぐる人々—」(続日本紀研究会編『続日本紀の諸相』塙書房, 2004年), 山本「華嚴經講説を支えた学僧たち—正倉院文書からみた天平十六年の様相—」(『南都仏教』87, 2006年)。山本「東大寺華嚴宗の教学と実践—天平勝宝三年の『章疏目録』を通して—」(『南都仏教』91, 2008年)。
- (88)——註(85) 中林『日本古代国家の仏教編成』。
- (89)——大平聡「天平勝宝六年の遣唐使と五月一日経」(笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令論集』上, 1993年), 栄原永遠男「鑑真将来経の行方」(初出1997年, のち註(2) 栄原『奈良時代の写経と内裏』所収)。若井敏明「鑑真将来経について」(『続日本紀研究』337, 2002年)。
- (90)——鷲森浩幸「奈良時代における寺院造営と僧—東大寺・石山寺造営を中心に—」(『ヒストリア』121, 1988年)。
- (91)——註(79) 大平「五月一日経の勘経と内裏・法華寺」。山本幸男「慈訓と内裏」(『仏教史学研究』50-2, 2008年)。
- (92)——上島享「平安仏教」(吉川真司編『日本の時代史5 平安京』吉川弘文館, 2002年)。上川通夫「一切経と古代の仏教」(『愛知県立大学文学部論集』47, 1998年)。日本仏教研究会編『日本仏教の研究法—歴史と展望—』(『第Ⅱ期日本の仏教』2, 法蔵館, 2000年)の古代のパート(上川通夫執筆)。
- (93)——榎本淳一「日本古代における仏典の将来について」(『日本史研究』615, 2013年)。
- (94)——栄原による編集後記(『正倉院文書研究』8, 2002年)。
- (95)——栄原による編集後記(『正倉院文書研究』10, 2005年), 註(2) 栄原『正倉院文書入門』。
- (96)——註(85) 中林『日本古代国家の仏教編成』, 註(87) 山本「東大寺華嚴宗の教学と実践」。
- (97)——2010~2012年度科学研究費補助金研究成果報告書基盤研究(C)『経典目録よりみた古代国家の宗教編成策に関する多面的研究』(研究代表者中林隆之)(2013年)。
- (98)——日本語学会(国語学会)編『日本語の研究(国語学)』誌上の1988年から2011年までの「日本語学界(国語学界)の展望」(2年ごとに特集)を参照した。
- (99)——古代史学・考古学・国語学・国文学の学際的シンポジウム「古代日本の文字世界」をまとめた同名の報告集が大修館書店から2000年に刊行されている。
- (100)——歴博の展示図録『古代日本 文字のある風景』(2002年)で栄原永遠男が担当した「お経を写す—百部梵網経の場合—」の解説は, 写経の製作過程や写経所内での案主とのやりとりなどが, 具体的に, かつイラスト入りで解説されており, イメージをつかむのに役立つ。
- (101)——犬飼隆「古代語資料としての出土物」(『日本語の研究』4-1, 2008年)。
- (102)——桑原祐子『正倉院文書の国語学的研究』(思文閣出版, 2005年)。
- (103)——奈良女子大21世紀COEプログラム報告集Vol.4・9『正倉院文書の訓読と注釈—請暇不参解編(一)(二)』(2005・07年)。同報告集Vol.11『正倉院文書にみる古代日本語』(2007年)。同報告集Vol.25『正倉院文書の訓読と注釈—啓・書状編(一)』(2009年)。2007~2009年度科学研究費補助金研究成果報告書「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」(研究代表者桑原祐子)のⅠ『正倉院文書の訓読と注釈—造石山寺所解移牒符案(一)(桑原祐子)』(2010年)。Ⅱ『正倉院文書の訓読と注釈—啓・書状(黒田洋子)』(2010年)。宮川久美「正倉院文書の訓読と注釈—月借錢解編(第1~4分冊)』(『奈良佐保短期大学研究紀要』18~21(2011~2014年)。2010~2013年度科学研究費補助金研究成果報告書「正倉院文書による日本語表記成立過程の解明」(研究代表者桑原祐子)のⅡ『正倉院文書の訓読と解釈—造石山寺所解移牒符案(二)—(桑原祐子)』(2014年)。
- (104)——最近の研究では, 2007~2009年度科学研究費補助金研究成果報告書「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」(研究代表者桑原祐子)Ⅲ『正倉院文書からたどる言葉の世界(一)(中川ゆかり)』(2010年)。桑原祐子「正倉院文書の『堪』と『勘]—古代下級官人爪工家麻呂の学習—」(萬葉語学文学研究会編『萬葉語文研究』8, 和泉書院, 2012年)。小川靖彦「天平初期における呉桃紙を用いた体系的経典書写—山階寺西堂経の意義—」(『正倉院文書研究』13, 2013年)など。桑原祐子「正倉院文書の『早速]—和製漢語のうまれる場面」

(奈良女子大学『叙説』40, 2013年)。桑原祐子「道豊足の人事」(『正倉院文書研究』13, 2013年)。2010～2013年度科学研究費補助金研究成果報告書「正倉院文書による日本語表記成立過程の解明」(研究代表者桑原祐子)のⅡ『正倉院文書からたどる言葉の世界(二)(中川ゆかり)』(2014年)。

(105)——加藤豊仍「書としての正倉院文書研究序説—『手実』考—」(『正倉院文書研究』8, 2002年)。

(106)——川上貴子「奈良時代後期における大字写経の研究—善光朱印経を中心として—」(『鹿島美術研究年報』21別冊, 2004年)。川上「奈良朝における大聖武の受容意図」(『デアアルテ』17, 2001年)。

(107)——杉本一樹「猷物帳の書」(初出1999, 註(59)杉本『日本古代文書の研究』)。

(108)——佐藤朋子「東大寺法華堂・戒壇院諸像考」(『デアアルテ』16, 2000年)。根立研介「國中連公麻呂考」(『正倉院文書研究』8, 2002年)。

(109)——梶谷亮治「上楯麻呂の画事」第31回正倉院文書研究会(2012年)での口頭報告。

(110)——吉川真司「東大寺の古層—東大寺丸山西遺跡考—」(『南都仏教』78, 2000年)。高橋照彦「東大寺前身寺院に関する試論」(『鹿園雑集』5, 2003年)。奥村茂輝「法華寺阿弥陀浄土院の造営」(『仏教芸術』275, 2004年)。

(111)——海野聡「奈良時代における様工の活動と主体性」(『建築史学』56, 2011年)。

(112)——註(2) 栄原『正倉院文書入門』。

(113)——飯田剛彦「正倉院事務所蔵『正倉院御物目録 十二(未修古文書目録)』(一)～(三)」(『正倉院紀要』23～25, 2001～03年)。西洋子「『未修古文書目録』と『続々修正倉院古文目録』の対照表(一)」(『正倉院文書研究』11, 2009年)。西洋子・矢越葉子「『未修古文書目録』と『続々修正倉院古文目録』の対照表(二)(三)」(『正倉院文書研究』12・13, 2011・2013年)。

(114)——遠藤慶太「正倉院文書による写経事業の復原

方法覚書」(金沢工業大学日本学研究所『日本学研究』9, 2006年)。

(115)——註(2) 栄原『正倉院文書入門』。

(116)——註(2) 栄原『正倉院文書入門』。

(117)——李炳鎬訳『정창원 문서 입문』2012年。

(118)——正倉院事務所編『聖語蔵経巻』(カラー CD-R版, 丸善, 2000年)。

(119)——飯田剛彦「聖語蔵経巻『神護景雲二年御願経』について」(『正倉院紀要』34, 2012年)。

(120)——野尻忠「藤田美術館所蔵『大般若経』(魚養経)の調査研究」(科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書『奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流』(代表湯山賢一)2011年)。

(121)——松本包夫「聖語蔵五月一日経の筆者と書写年代その他(1)～(3)」(『書陵部紀要』15～17, 1963～65年)。

(122)——東大寺図書館「正倉院聖語蔵経巻調査報告(一)」(『南都仏教』86, 2005年)。同「東大寺収蔵経巻調査報告(一)(二)(三)」(『南都仏教』87・89・91, 2006～08年)。

(123)——野尻忠「斤量記載からみた正倉院丹裏文書の研究」(『古文書研究』57, 2003年)。

(124)——飯田剛彦「玻璃装仮整理文書断片の調査」(『正倉院紀要』26, 2004年)。

(125)——註(55) 市川理恵「下級官人と月借錢」。

【付記】この論考は、2013年1月26日に東大寺総合文化センター金鐘会館で開かれた「正倉院文書の高度情報化研究シンポジウム」での報告(予稿集)を整理・補訂したものです。国語・国文学における正倉院文書研究については、桑原祐子氏・中川ゆかり氏より多大なるご教示をいただきました。記して感謝の意を表します。なお、シンポジウム当日にいただきました石上英一氏のご教示には、筆者の能力不足から、この論文に反映させることができませんでした。ここにお詫び申し上げます。

(学識経験者, 人間文化研究機構連携研究員)  
(2013年1月7日受付, 2014年5月26日審査終了)

---

## Development and Problems in the Study of *Shakyojo* Documents (the Documents of the Sutra Copying Office)

YAMASHITA Yumi

A new trend in the study of Shoso-in documents started with two university seminars: the seminar of Kan'ichi Minagawa, beginning in 1983 at the University of Tokyo; and the seminar of Towao Sakaehara, following in the wake of Minagawa and beginning in 1988 at Osaka City University. They considered Shoso-in documents as *dankan* (fragmentary pieces of writing) “rearranged” by Hoida Tadatomo and his successors, and regarded it essential to first restore the documents to the original form made by *Shakyojo* (the sutra copying office) of Todai-ji Temple in the Nara period by presuming and verifying the sequence of the pieces. Through this preparation work, they classified the documents into categories according to individual sutra-copying projects and, more broadly, to extensive account book collections, each of which consists of multiple sutra-copying projects. Thus, the study of individual sutra-copying projects was conducted as a fundamental research for *Shakyojo* documents, and it came to fruition as the Shoso-in document database of Osaka City University. Moreover, through this study, new findings were published one after another, covering a wider range of topics, such as essays on account books, the internal structure of *Shakyojo*, salary payment methods, and the life of *Shakyojo* workers. At the same time, the research derived from the traditional study of Shoso-in documents also developed and flourished, leading to research on the transition in the sutra-copying system; the construction of Todai-ji, Ishiyama-dera, and Hokke-ji Temples; financial aspects of *Shakyojo*; the reality of *Shakyojo* workers and low-rank government officials; the inheritance of *Shakyojo* documents traced back by examining the relationship of both sides of the paper; and the “rearrangement” of Shoso-in documents. Outcomes were also produced by the research that incorporated the perspective of Shoso-in documents into the study of ancient paleography and that analyzed *Shakyojo* documents from the viewpoint of Buddhist history. Since 2000, Shoso-in documents have drawn attention from researchers in other academic disciplines. In particular, such a study has been advanced in the fields of Japanese language and literature while the study environment has been developed. Researchers in the fields of archaeology, art history, architecture, and other disciplines have also started to pay attention to the documents. Thus, interdisciplinary joint studies are being carried out. Now that Shoso-in documents are attracting world attention, they can be considered as a global cultural asset. Expectations are growing that they can lead to even more findings.

Key words: Minagawa's seminar, Study of individual sutra-copying projects, Study of ancient paleography, Buddhist-historical analysis, Interdisciplinary joint research

---